様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １０ 日現在

機関番号：３２６８０
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２３６２

研究課題名（和文）紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言アクセント類型論の形成

研究課題名（英文）Formation of Typology in the Accents of Southeastern Kii Peninsula Dialects

研究代表者
平田　秀（HIRATA, Shu）

武蔵野大学・グローバル学部・准教授

研究者番号：６０７７７６１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：先行研究によって、紀伊半島熊野灘沿岸地域で話される諸方言は、非常にバリエーションの豊かなアクセント体系をもつことが指摘されている。申請者は、紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言について、現地調査に基づいた記述的研究を実施した。
コロナ禍により、研究期間当初の計画通りに現地調査が遂行できなかった。その中で、現地調査を実施した三重県熊野市木本方言・三重県南牟婁郡御浜町阿田和方言は、両者ともに申請者がこれまでに現地調査を実行した方言とは大きく異なるアクセント上の特徴をもち、先行研究の内容を支持する結果となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語諸方言のアクセント研究については、戦後の間もない時期に網羅的な現地調査が実施されており、特に方言の系統面は、非常に早い段階で概略が解明されている。
一方、個々の方言がどのようなアクセント体系をもつかについては、未解明の方言が多く残されている。申請者が研究を遂行した熊野灘沿岸地域諸方言についても、早い段階に調査が行われたのち、未解明の部分が多く残されていた状態であった。申請者は、熊野灘沿岸地域の複数地点で現地調査を行い、諸方言のアクセント体系を解明することに主眼をおいた研究を遂行した。このことは、日本語諸方言のアクセント研究に寄与できる部分が大きいと考える。

研究成果の概要（英文）：Previous studies have demonstrated that the dialects spoken in the southeastern Kii Peninsula region exhibit highly varied accent systems. I conducted a descriptive study based on a field survey of various dialects in the region.
Due to the COVID-19 pandemic, a field survey could not be carried out as originally planned. However, the results from field surveys of the Kinomoto dialect in Kumano City, Mie Prefecture and the Atawa dialect in Mihama Town, Minamimuro County, Mie Prefecture, both of which exhibit accent features that differ significantly from those of the dialects for which I have conducted field surveys in the past, support the findings of earlier research.

研究分野：言語学

キーワード：言語学　音韻論　方言学　日本語アクセント論　三重県

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

紀伊半島で話される諸方言のアクセントについて、ほぼ全域で京都方言や大阪方言と系統を同じくする中央式諸方言が話されていることが広く知られている。三重県北中部や和歌山県のほぼ全域で中央式諸方言が分布する一方で、尾鷲（おわせ）市や北牟婁（きたむろ）郡紀北（きほく）町など三重県南部や、和歌山県東端の熊野灘沿岸地域では、中央式諸方言とは系統を異にする方言が話されていることが早い段階から指摘されている。

この指摘を行った先行研究の代表として金田一春彦（1975）『日本の方言』など一連の研究が挙げられ、同地域に非中央式諸方言が分布することが述べられている。図 1 は中井幸比古（2002）『京阪系アクセント辞典』による「京阪系アクセント」の分布図であり、京都方言・大阪方言と同一の系に属すると判断された方言の話されている地域が示されている。

図 1 中井（2002）による京阪式アクセント分布図

また、図 2 に示す通り、金田一（1975）では、熊野灘沿岸地域には多様なアクセント上の特徴をもつ諸方言が分布することが指摘されている。図 2 の北端にあたる三重県松阪市から、南端の和歌山県東牟婁郡太地（たいじ）町までは 150km 程度の距離である。150km の間に金田一(1975)は「甲種方言　標準式に近いもの」「甲乙両種の中間方言　尾鷲式」「型の区別の少い方言」など、10 種の方言が分布すると述べている。

図 2 金田一（1975）による熊野灘沿岸地域諸方言の分類

諸方言の系統面では、上記の通りの事実が広く知られていたが、熊野灘沿岸地域諸方言のアクセント体系の詳細については、未解明の部分が多く残されていた。申請者は、本研究の遂行以前に、三重県尾鷲市尾鷲方言についての詳細な記述的研究を実施し、アクセント体系の細部に至るまでを解明した。また、尾鷲方言は非常に稀な、3 種の「式」（文節全体が担い手となる音調）の対立をもつことを指摘した。

## ２．研究の目的

本研究は、同地域諸方言について、その共時的なアクセント体系の詳細を明らかにし、アクセント上の特徴からみた類型論を形成することを目標とする。「1. 研究開始当初の背景」で述べた通り、同地域諸方言についての先行研究はその系統関係を明らかにすることを目的としたものが早い段階で存在する。本研究では、諸先行研究の内容を発展させ、現地調査に基づいた共時的なアクセント体系の詳細の解明を目指すとともに、同地域諸方言のアクセント類型論形成を目標とする。

## ３．研究の方法

熊野灘沿岸地域諸方言のうち、先行研究を参照し、現地調査を実施する地点を選定する。地点の選定には、網羅的な記述のある金田一春彦（1975）『日本の方言』を参照する。

選定された地点では、方言話者との対面形式で、語彙リストの読み上げ形式を中心に、方言アクセントの聞き取り調査を行う。

## ４．研究成果

令和 2 年以降のコロナ禍により、高齢化の進む熊野灘沿岸地域での現地調査の実施がかなわなかったため、申請者がそれまでの研究遂行で取得した方言アクセントについてのデータの分析を中心に、本研究の助成を受けた成果発表・それ以外の成果発表も含め、研究を遂行した。

研究期間中、以下の 2 地点で現地調査を実施した。

・三重県熊野市木本（きのもと）地区：アクセント上の特徴としては、京都方言に似た体系をもつ。なお、京都方言と同様の体系をもつ方言は、紀伊半島全域に広くみられるが、熊野灘沿岸地域においては稀である。

・三重県南牟婁郡御浜（みはま）町阿田和（あたわ）地区：現時点では詳細の不明な点が多く残り、今後のさらなる調査が必要な状況である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>HIRATA Shu | ４．巻<br>1 |
| ２．論文標題<br>On the Accented Moraic Oral Obstruent in the Owase Dialect (Mie Prefecture) | ５．発行年<br>2019年 |
| ３．雑誌名<br>Proceedings of International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia - Poster Session | ６．最初と最後の頁<br>1-7 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>10.15026/94150 | 査読の有無<br>無 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>平田秀 |
| ２．発表標題<br>三重県尾鷲方言の人名アクセントと呼びかけイントネーション |
| ３．学会等名<br>日本言語学会第161回大会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>HIRATA Shu |
| ２．発表標題<br>On “ tone sandhi ” in the Owase dialect (Mie, Japan) |
| ３．学会等名<br>NINJAL-UHM Linguistics Workshop on Syntax-Semantics Interface, Language Acquisition, and Naturalistic Data Analysis（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>HIRATA Shu |
| ２．発表標題<br>On the voiced obstruent geminates in the Owase dialect (Mie Prefecture, Japan) |
| ３．学会等名<br>6th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology（国際学会） |
| ４．発表年<br>2019年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>HIRATA Shu |
| ２．発表標題<br>On the accented moraic oral obstruent in the Owase dialect (Mie Prefecture, Japan) |
| ３．学会等名<br>Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization（国際学会） |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>平田秀 |
| ２．発表標題<br>三重県木本方言のアクセントにおける式について |
| ３．学会等名<br>「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」オンライン研究発表会（2021年度前期） |
| ４．発表年<br>2021年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---|---|